

---

# 駒

夕焼け

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

駒

### 【コード】

N8303K

### 【作者名】

夕焼け

### 【あらすじ】

どこのどこの言いが、所詮は駒だ。それ以上でもそれ以下でもなく。

昔、中東あたりでテロ組織に捕らえられた米兵が、ナイフで首を切り落とされる動画を見た事がある。  
もちろん作り物じゃなくて、本物の首切り動画だ。

見てる最中、ずっと首の後ろのあたりや眉間の奥の方がジリジリと焼けるように痛くて、でもその映像から目を離せなくて、とゆうか首も半ば攣りそうなくらいに強張ってて動かせなくて、首が胴体から切り離されるまでを瞬きもせずに見つめてた。

見終わった後も、黒くてもやもやした、お風呂の配水管の中のヘド口のようなものを胃に目一杯押し込まれたような気分の悪さが続いた。

そんな時のような感覚になる。

人に触れると。

人に触れられると。

人が怖い。

人に対して、何か形容しがたい恐怖がある。

この体に触れたそれが大好きな人の手であっても、ゴキブリがこの体を直に這ってるような、そんな嫌悪感をもよおす。

目の前にいる人がどれだけ親しい人であっても、その人の一挙手一動に対して恐怖を感じる。

「この人は自分に危害を加えない」と分かっているても、ビクツとし

てしまう。

目の前にいる人がどれだけ優しい笑顔を僕に向けてても、その人が次の瞬間鬼の形相をして、怒鳴りながら俺を殴りつけるような、そんなイメージが頭の中にちらつく。

「そんな事はないんだ、大丈夫だ」と自分を落ち着かせようと努める。

でも「そんな事が実際にかつて起こったじゃないか」と、経験則が警告の鐘を鳴らす。

「自分を信じてくれ」と僕に言った全ての人が僕を裏切ったわけじゃない。

それは確かにそうだ。

でも、僕を裏切った人の全てが「自分を信じてくれ」と僕に言ったそれもまた事実だ。

何を信じていいのか、分からなくなる。信じるのが怖くなる。

首の後ろの筋肉の奥がちりちり痛んで、眉間の奥のほろがじくじく痛んで、息をいくら吸い込んでも吸い足りないような感覚になる。

何を信じることもしたくなくなる。

僕と関わる人の多くが、僕に「自分を信じて欲しい」と思ってる。当然の事だ。

人は誰かと深く関わり合う時、相手に自分を信じてほしいと思うものだ。

それはすごく当然の心情だ。

分かってるから、信じきれなくても、信じたふりをする。それを相手は望むからだ。

だから信じたふりをして、信じたつもりになって触れる。

ゴキブリが這うような、おぞましい感覚。

おぞましいのに、汚される事に昂ぶりもある。

おぞましいから、だ。

汚されて、壊されて、破滅することに昂ぶりを覚える。

そんな風に昂ぶる自分に心底吐き気がして、死にたい気持ちになる。こんな醜い「自分」っていう入れ物から這い出て、もう少しマシな、純粹で誠実な生き物になりたいと思ってしまう。

染みが消えない。

いくらこすってもこすってもこすっても、消えない。

経年による風化に任せてみたけど、気付けば15年以上経ってた。でも消えずに残ってる。

いつかは消えるだろうか。

いつかはおぞましさもなく、背筋に走る悪寒もなく、体を強張らせることもなく、ただ純粹なぬくもりを、人の肌に感じ取ることが出来るだろうか。

願う気持ちと諦めが今は混在してる。

僕と深く関わった人間の多くは、僕に「自分を信じてくれ」といって手を差し出した人間のほとんどは「やっぱり無理だった。自分には荷は重過ぎる」といって去って行った。

僕に信じさせておいて、都合が悪くなったらさっさと立ち去るのだ。

「もう無理だ、重い、煩わしい、全部捨てたい」と最も強く思っているのは、他の誰より僕自身なのに、僕だけが「それ」を捨てて立ち去る事を許されない。

だから、いつかは幸せになりたいと願う気持ちと、こんな厄介事を抱えて幸せになんてなれるわけないだろうっていう諦めが心の中に同居してる。

幸せを目指して潔く行きたい自分と、綺麗なものを諦めて、浅ましく、卑しく、そうやってでも生き抜く事を望む自分が同居してる。

幸福を目指す人生と、諦めて生きる人生、どっちを自分が望んでるのか、もう分からない。

正直、それを考える事をもう半ば放棄してる部分がある。

相手がエゴで僕と関わるなら、僕もとことんエゴでそれに対応するし、相手が誠意で僕に接するなら、僕もなけなしの誠意を振り絞る。僕の個人的な意思はほとんどそこにはない。

どっちだっていい。

どっちを生きること、たいして苦痛じゃない。

エゴに対して誠意で応える生き方や、誠意に対してエゴで応える生き方よりは苦痛を感じない。

地球上に配置された100億の駒のうちの一つが、醜く卑しく生きようが、尊く気高く生きようが、たいした問題じゃない。

あるいは、どうなるのであれ、それはもう多分「駒」の意味でなく、駒を内包する総和の意味だ。

そんなふうに、最近思う。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8303k/>

---

駒

2010年10月21日09時32分発行